

# 國學院大學學術情報リポジトリ

郁達夫とロバート・バーンズ：  
「還郷記」「還郷後記」を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-03-26 キーワード (Ja): 郁達夫, ロバート・バーンズ, 「還郷記」, 「還郷後記」, 中国近代文学 キーワード (En): 作成者: 大久保, 洋子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/2000257">https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/2000257</a>

# 郁達夫とロバート・バーンズ

——「還郷記」「還郷後記」を中心に——

大久保 洋子

## はじめに

郁達夫（一八九六—一九四五年）の散文「還郷記」と「還郷後記」（いずれも一九二三年）は、作者が日本留学から帰国し、上海で失業と貧困に苦しみ、失意の中で故郷に帰る際の経験を描いた道中記である。

十年近くに及ぶ日本留学で、国内外の文学作品を読み漁ったといわれる郁達夫らしく、この二作品には古今東西の文学作品からの引用や典故が多く、一読して彼の文学知識の豊かさを感じさせる。この中で、スコットランドの詩人、ロバート・バーンズ (Robert Burns, 一七五九—一七九六年) に関する一節が二作品ともに挿入されているのが目を引く。

さらに、「還郷記」と「還郷後記」の間に発表された散文「詩

人の末路」でも、バーンズのエピソードと言葉が紹介されている。

郁達夫は特に「沈淪」など初期の作品群において、多様な外国の作家・作品を引用しており、小説における欧文表記が多いことがすでに指摘されているが、連続して掲載された三作品でいずれもバーンズに触れていることは注目に値する。

郁達夫とバーンズの関係についてはこれまでの研究で触れられたことがなく、本稿ではこの二者の関係および引用の意味と効果について考察したい。

## 一 バーンズについて

### 一・一 人と生涯

ロバート・バーンズは十八世紀後半のスコットランドに生きた詩人で、スコットランドでは「国民詩人」として人々に愛されている。一七五九年一月二十五日にスコットランド南西部エアシャーの寒村アロウエイに生まれた。父親のウィリアム・バーンズは農民であつたが、極めて厳格な性格で、知性があり、哲学や神学についての会話を好んだという。母親には教育はなく、字は書けなかつたが、聖書はかろうじて読め、たくさん歌を知つていたことが、詩人としてのバーンズの成長に大きな影響を与えたといわれている。

ロバート・バーンズは七人兄弟の長男であつた。生活は困窮していたが、父親は子供の教育には非常に熱心で、苦しい家計の中から教育費を捻出し、出来る限りの教育を子供たちに受けさせたという。バーンズは六歳から学校に通い始め、のちに近隣住民が共同で雇つた青年教師の下で、イギリス古典文学やフランス語などを学んだ。日常で使う言葉はエアシャーで話されるスコッツ語であつたが、必要に応じて格調高い英語を完璧に話すことができたという。<sup>(2)</sup>  
 バーンズ家の子供たちは生活のために農場で厳しい農作業をしなければならず、ロバートは十三歳で脱穀を手伝い、十五歳で一人前の大人の仕事をしていた。幼いころ一緒に

遊んだ地主の子供たちは、成長するにつれて彼らを見下すようになった。バーンズは、地位と人間の価値はまったく関係がないという信念を捨てず、のちに「何と言つても人は人」(For a' That and a' That) という詩を書いている。

一七七三年、バーンズはある農家の娘に恋をし、その恋心を詩に歌う。十七歳になるとカントリー・ダンスの学校に入り、恋愛に熱中した。昼間の労働が終わると恋人のもとへ行き愛を語るのが当時のスコットランドの習わしで、バーンズはこうした生活の中で数々の詩を書いていった。

一七八四年に父親が亡くなると、バーンズは自由を満喫するようになり、翌一七八五年に父親の看病をしていた女性との間に私生児をもうけている。一七八六年には将来の妻となるジーン・アーマーを妊娠させ、ジーンとの結婚を彼女の両親に反対される中、さらに別の女性と熱烈な恋をしている。

ジーンの父親から子供の養育費を請求され、また収穫が少なく暮らしが立ち行かなくなつていたため、バーンズはジャマイカに移住する計画を立てる。だが乗船の手はずまで整えたものの、出発を先延ばしし、最終的には計画そのものを取りやめている。この時、旅費を工面するために友人らから詩集の出版を勧められ、一七八六年に『詩集――

主としてスコットランド方言による』(Poems, Chiefly in the Scottish Dialect) を刊行した。当時、詩人バーンズの名はかなり広く知れ渡っており、初版の部数は六二〇部に入った。『詩集』は老若男女問わず大歓迎を受け、数々の文芸誌から「スコットランドが生んだ天才」「天与の農夫」などと絶賛された。

『詩集』の成功で、バーンズは初めて首都エディンバラに上京し、この文化の都で社交界に出入りするようになる。上流階級の女性たちと交際しつつも、身分の格差に悩んで精神的な恋愛にとどまり、むしろ下層社会の女性との間で恋愛感情を発散させた。こうした中でジーンを妻として認め夫婦となるが、奔放な恋愛は続き、彼の周囲には常に若い女性の姿があったという。

数々の恋愛を重ねる一方で、バーンズは社会や宗教、政治にも関心を寄せていた。幼少期から過酷な労働を重ね、一家全員が総力をあげて働いても肉屋の肉を食べられない時期があったほど貧しく苦しい生活が、階級差別や不平等を鋭く認識し、抑圧と搾取を嫌悪する彼の精神を培ったといわれる。弟のギルバートによると、ロバートは裕福な人々に対し強い羨望や妬みを抱いていたという<sup>3</sup>。

一七八一年にはフリーメイソン協会に入会し、三七歳で

生涯を閉じるまで会員であり続けた。一八世紀のフリーメイソン協会は、時代の啓蒙精神を取り入れ、さらに組織が個人を援助する互助精神を貫き、自由、平等、博愛という新時代の実現を目標に掲げていた。バーンズの『詩集』の出版や移住費用の調達は、フリーメイソン協会の会員たちの協力によるところが大きかったといわれる<sup>4</sup>。

バーンズは一七九六年七月二十一日に死去した。晩年はリユーマチに苦しみ、死因は細菌性のリユーマチ熱であったといわれる。また『詩集』の成功にもかかわらず印税は少なく、のちに始めた収税士の給料も減少し、慢性的な生活苦に陥っていた。死の九日前にも、知人に借金を申し入れる手紙を書いている<sup>5</sup>。

## 一・二 バーンズの詩

バーンズは十五歳で詩を書き始めてから三十七歳で生涯を閉じるまでの二十二年間に、確認されているだけで計六百五篇の詩を書いている<sup>6</sup>。

今日まで、バーンズの詩や歌はさまざまな版の作品集が出版され、世界各国の言語に翻訳されている。毎年一月二十五日の誕生日は「バーンズ・ナイト」「バーンズ・サパー」として、世界中でバーンズ詩の朗読などのイベントが催さ

れている。日本で専門家以外にバーンズを知る人は決して多いとはいえないが、卒業式の定番である「蛍の光」の原詩「遙かな遠き昔」(Auld Lang Syne)<sup>7)</sup>の作者だといえ、誰もがそのメロディを想起できるだろう。

バーンズの詩作品の幅はきわめて広範にわたり、「ネズミに寄せつ」(To a Mouse)などの自然を称える詩や、恋愛対象となった数々の女性を称える恋愛詩のほか、政治詩、宗教詩、さらには「ジョン・バーレイコーン」(John Barleycorn)、「ハギスのために」(To a Haggis)のような酒や食べ物を賛美する詩、「シヤンタのタム」(Tam o' Shanter)のような魔女の登場するゴシック風の詩、また民衆に喜ばれるわいせつな詩も書いている。

木村正俊は「バーンズの現在——リアルな詩人像を求めて」で、教会関係者や地主、貴族、政治家、国王にまでも異を唱え、詩の中で彼らを痛烈に非難し、あからさまに揶揄する一方で、敬虔な信仰に生きる小作人一家を取り上げ、農夫の美德や家庭の価値を称えるようなバーンズの二面性を指摘し、「この両極の表現は矛盾のようにみえるが、バーンズの内面では、二つの相反する価値観が共存することが可能だったのである」と述べている。木村はこのようなバーンズの性質について、スミス(G.Gregory

Smith)の研究に基づき「カレドニア的相反」(Caledonian anti-syzygy)と呼び、これは「スコットランドに特徴的にみられる傾向であるが、バーンズの場合とくに目立つようにみえる」と指摘している<sup>8)</sup>。

ここで郁達夫について考えてみると、彼はその作家人生で「沈淪」や「茫茫夜」のような頹廢的な作品のほか、「春風沈酔の夜」「遅桂花」「過去」のような内省と調和に満ちた作品、「薄奠」のような弱者への同情と義憤を描いた作品などを残している。いずれも作者自身の経験が作品に色濃く投影されてはいるものの、恋愛、社会の不正の告発、慎ましく生きる庶民への同情と称賛と、題材は多様である。また、作品中で政治家や軍人への嫌悪を繰り返しあからさまに示し、金持ちや権力者に嫉妬するなど、気質の面でバーンズに共通する点が多い。

加えて郁達夫自身の人生もまた、母親が決めた最初の妻のほか、留学中の恋愛遍歴、二番目の妻・王映霞とのドラマティックな恋愛と破天荒な生活、別れなど、恋愛と波乱に満ちたものであった<sup>9)</sup>。

このような郁達夫の気質は、バーンズを含む外国文学の作家、特にロマン主義の作家・作品の影響や、時代と社会の影響を指摘することもできるだろう。だが、より多くは

郁達夫自身の性格傾向によるところが大きく、このような性質の持ち主であったからこそ、バーンズのようなロマンスと波乱に満ちた人生を送った作家に強く惹かれたといえるだろう。

## 二 バーンズの受容

### 二・一 近代日本におけるバーンズ受容

日本で初めてバーンズが紹介されたのは、中村正直の『西国立志編』（一八七〇年）である。また全国規模では、明治時代の『小学唱歌集』（初篇〜第三編、一八八一〜八四年）に編集された形でバーンズの詩が採用されたものの、詩そのものの紹介は明治中期に至ってからである。

難波利夫『日本におけるロバート・バーンズ書誌』によると、明治期に発表されたバーンズに関する著書・論文は六十篇、大正期は七十七篇に上る。<sup>10)</sup>

この中で特に目を引くのは、夏目漱石の講演録「英国詩人の天地山川に対する観念」（一八九三年）である。これは東京帝国大学三年次に在学中の漱石が、同大学文科大学文学談話会で同年一月に行った講演の記録である。『哲学

雑誌』第八巻第七十三号〜第七十六号に四回に分けて掲載され、岩波書店から刊行された最初の『漱石全集』の第十巻（一九一八年）に収録された。

漱石はの中で、クーパー、トムソン、ワーズワースなどを引き合いに出し、バーンズの詩に表れた自然観について論じている。「兄弟詩人デイヴィーへの書簡詩」(Epistle to Davie, a Brother Poet)、「ネズミに寄せて」、「山のヒナギクに寄せし」(To a Mountain Daisy)、「連れに撃たれたウサギがよろめきつつ側を通るのを見し」(On Seeing a Wounded Hare Limp by Me, Which a Fellow Had Just Shot at)などの詩がそれぞれ一、二連ずつ引用され、論じられており、他の詩人に比べるとバーンズをより高く評価する内容となっている。<sup>11)</sup>

また一八九六年（明治二十九年）には国木田独歩が「国木田哲夫」の名でカーライルのバーンズ論の一節を翻訳し、「バルンズの失敗」として『国民之友』第三一四号に発表している。

明治後期からは、バーンズの生地を訪れた旅行記が散見されるようになる。主なものに桜井鷗村「蘇国詩人バーンズの故郷」（『欧州見物』、丁未出版社、一九〇九年）、下田将美「静寂を思ふ 蘇克蘭印象記」（『山上の展望』、昭文堂、

一九二二年)、大谷繞石「エアの半日」(『北の国より』、敬文館、一九二二年)などがある。

大正期に出版されたバーンズ詩に関する著書で、特に注目すべきものは岡倉由三郎注釈 *Select Poems of Robert Burns* (研究社、一九二三年、以下『バーンズ詩選』)である。これは一九二二〜三二年にかけて全百巻が刊行された「英文学叢書」の一つで、内容は序文「不平・満足・自由」、伝記、バーンズの詩風、発音と綴字と文法、詩集・参考書リスト、年譜、本文からなる極めて充実した構成である。本文には詩・書簡詩が四十編、ソング・バラッドが五十七篇収録されている。同書は注釈が非常に優れていたため、多くの旧制高校や大学でテキストとして採用されたといふ<sup>(12)</sup>。

## 二・二 郁達夫のバーンズ受容

郁達夫は小説「胃病」で、ウィリアム・アーネスト・ヘンリーの詩集『病院にて』(*In Hospital*)について触れ、『病院にて』の完成後も容易にそれを出版できなかった詩人の苦しみに同情を寄せている。そして、ヘンリーを知ったのは高等学校時代、バーンズの詩を通してであったと書いている。

郁達夫は「胃病」(初出時は「友情與胃病」)の発表時に

掲載した付記の中で、「胃病」は当初、病中の随感録として書くつもりであったが、書いてみると小説のような作品になったため、短編小説に改めたことを打ち明けている。このことから、「胃病」に描かれるエピソードは、作者自身が実際に経験した出来事であったと考えて良いだろう。

私とヘンリーの最初の接触は、高等学校時代であった。その頃、私はバーンズの詩を熱心に研究していた。私が持っているバーンズの詩集 (*Poetical Works of Robert Burns*) はこのヘンリー氏が刊行したものだ。私は巻頭の彼のバーンズ評伝を読み、彼が同情心と識見のある批評家であることを知った<sup>(13)</sup>。

岡倉由三郎注釈『バーンズ詩選』の「詩集及び参考書」には、「詩集」の欄に「*Poetical Works*, ed. by W.E.Henley (*Houghton*)」<sup>(14)</sup>とあり、これは郁達夫が所有していたというヘンリーの著書であろう。『バーンズ詩選』が出版されたのは郁達夫が中国に帰国した後であり、郁達夫が『バーンズ詩選』から *Poetical Works* を知ることはありえない。だが『バーンズ詩選』が *Poetical Works* を参考書リストに掲げているということは、*Poetical Works* が当時のバーンズ

研究において重要な資料に位置づけられていたことを示している。

*Poetical works* の構成は、ヘンリーによるバーンズ評伝「Life, Genius, Achievement」、本文、巻末に注釈、用語集、人名・地名索引、冒頭句索引、題名索引という充実したものである。バーンズ評伝は五十四頁にわたる長編で、豊富な注がついており、本文は三百二十三頁である。<sup>15)</sup> これらの資料から、郁達夫はかなり網羅的にバーンズについて学び、バーンズの生涯と詩についてまさに「熱心に研究」していたといえる。

こうした「研究」の基盤は、郁達夫が日本で受けた高等教育と無縁ではない。郁達夫は一九一三年秋に日本に留学し、中国人留学生に予備教育を行うことを目的として開設された第一高等学校特設予科に一九一四年に入学、翌一九一五年九月に名古屋の第八高等学校第三部に入学している。第三部は医科であり、この選択は郁達夫とともに来日した長兄の郁曼陀の要望を受けたものであった。だが郁達夫自身は文学への志向が強かったことから、八高入学後に第一部（文科）に転部し、これがもとで長兄と齟齬をきたしている。

『第八高等学校一覽』第九年度（一九一六—一七年）の

氏名一覽によれば、「郁文」（郁達夫の本名）の所属は第一部丙類一年、第十年度は第一部丙類二年、第十一年度は第一部丙類三年と記載されている。

郁達夫が留学した時代の高等学校では、外国語の授業は文学作品や評論をテキストとしていた。八高第九年度（一九一六年度）第一部丙類一年次の英語のテキストは、Doyle の *The Green Flag* および *Typical Selections from Twelve Authors* であった。翌第十年度（一九一七年度）第一部丙類二年次の英語のテキストは、Stevenson の *New Arabian Nights* および同校編の *Macanlay* 著 *Milton* となっている。

第九年度と第十一年度の一部丙類三年次および第十年度三部第三年次の英語テキストには、Carlyle 著 *Essay on Burns* が採用されている。<sup>16)</sup>

『バーンズ詩選』の刊行以前から、バーンズの詩は高等学校の英語のテキストとして採用されており、バーンズに対する注目度も高かった。郁達夫はまさにこのような時代に、高等学校の英語の授業を通してバーンズを知ったといえる。

日本の高等学校時代の読書体験を通して、郁達夫の読書範囲は中国古典文学から西欧文学へ、創作意欲は旧詩から

小説へと拡大していったといえるだろう。その過程で、バーンズの受容は比較的早期に行われていた。<sup>(17)</sup>

また、前述の夏目漱石「英国詩人の天地山川に対する観念」を収録した『漱石全集』第十巻が刊行されたのは一九一八年で、当時郁達夫は八高文科三年に在籍しており、熱心にバーンズを研究していた時期であった。郁達夫が早くから漱石に注目し、のちに漱石の『文学論』から「ゴッ」という公式を紹介する文章を書いていることから考えても、この時期に郁達夫が漱石のバーンズ論を読んでいた可能性は高い。<sup>(18)</sup>

### 三 郁達夫作品におけるバーンズ

#### 三・一 「還郷記」「還郷後記」「詩人の末路」について

郁達夫がバーンズに触れている作品は、前述の「胃病」のほか、散文「還郷記」、「還郷後記」、「詩人の末路」（以下、「詩人の末路」）のみである。

「還郷記」は一九二三年七月二十三日〜八月二日、『中華新報』副刊『創造日』に連載された。

郁達夫が郭沫若、成仿吾、田漢ら中国人日本留学生とともに一九二一年に結成した文学団体創造社は、『創造日』に先立つ機関誌として『創造季刊』、『創造周报』を創刊、発行していた。郭沫若『創造十年』によると、『創造日』の創刊は『中華新報』の主筆張季鸞が持ちかけたものだった。当時、創造社のライバル団体と目されていた文学研究会は日刊紙『時事新報』に副刊『学燈』をもち、さらに北京『晨报副刊』、上海『民国日報』の『觉悟』を傍系として発行していた。郁達夫や成仿吾は、これに対抗してより機動力のある日刊の文芸誌を立ちあげる必要があると主張したという。『創造日』の創刊に際し、『中華新報』から編集費として毎月百元が支給され、編集長に就任した郁達夫がこのうち六十元を取り、成仿吾と郭沫若は二十元ずつを取った。それまで貧苦にあえいでいた郁達夫は、この定期収入を受けて創作により力が入るようになった。郭沫若はこの時の様子を次のように書いている。

達夫がその毎月の六十元を持つようになったのは、結果として大変よく、彼をしてあの『還郷記』『還郷後記』および未完成の『蘇州煙雨記』等の傑作をうませた。達夫としては当時が恐らく創作慾の最も旺盛な

時代であつたらう。彼の筆調は非常に速く、日本式の新聞連載小説のやり方にならつて、原稿も毎日一段ずつ書き、書きあげるとすぐ持つて行つて印刷に付した。<sup>(19)</sup>

この時連載したのが「還郷記」である。生活が安定して創作に全力を傾注できるようになつた中、日本で知つた新聞連載小説の方法を新たに導入し、毎日書いたものをすぐに印刷に回すなど、郁達夫はかなりの意欲をもつて執筆に取り組んでいたと考えられる。

「還郷記」は、外国留学を終えて上海に帰国したものの仕事がなく、生活苦から故郷の浙江省富陽に帰ろうとする作者の道中を描いた作品である。

作者は故郷に帰ろうとする前夜に友人たちと遅くまで語らつたために、出発当日に寝過してしまい、予定していた朝の杭州行き急行列車に乗り遅れる。やむなく鈍行に乗つて出発するが、駅で見かけた若い女性に妄想を抱いて接近し、警戒され、慌てて二等車の切符を買つてしまい、さらに車内で自棄を起こして飲み食いし、手持ちの金の多くを使つてしまふ。窓外の農村風景に安らぎを覚えるのも束の間、幸福そうな農民一家を目にしてわが身の不幸を強く感

じ、列車から飛び降りて自殺する考えを起こす。デッキの柵によじ登つたところで思いとどまり、打ち沈んだまま杭州の旅館に宿をとり、宿帳に氏名と職業を書く際、再び無名のまま漂泊するわが身を嘆いて涙をこぼす。杭州の街をさまよい歩き、西湖のほとりを散策すれば若い男女の姿にあてられ、宿に帰れば隣室の客人と娼婦の声に悩まされる。再び深夜の杭州をうろつき、食事をするが、さらに軽くなつた財布に落ち込み、湖のほとりの高級旅館の一室に盗みに入る妄想をする。翌朝はまたも寝過し、真夏の太陽に照らされ、人力車夫に罵られながら着の身着のまま杭州城を出て、いつ再会するかもしれない杭州の街に愛憎を込めた別れを告げる。

以上が「還郷記」のあらすじである。作者の空想が多く挿入され、自虐・自嘲に満ちた描写が多く、郁達夫の初期の小説に共通する特徴を強く表したものとなつている。散文に分類されてはいるものの、仮に小説として発表しても違和感がない印象を受ける。

「還郷後記」は一九二三年八月十七日～二十一日、『創造日』に連載された。タイトルと内容からして「還郷記」の続編である。ここでは、杭州から出発し、故郷富陽の家に到着するまでを描いている。

「還郷後記」は冒頭に、六朝の梁の詩人、呉均（四六九—五二〇年）の「與朱元思書」の一節を引用する。桐廬から富陽に至る富春江の美しい風景を描いた部分である。

続いてフランスの古い歌の歌詞が引用され、「家庭の懐よりも良い場所はどこだろう」という中国語訳から本文が始まる。富春江を渡り、作者の旅がいよいよ故郷の家に帰る最後の段階に入っていくことを暗示している。

杭州城を出て銭塘江の岸辺にやってきた作者は、付近の崩れかけた飯屋で料理を待つ間、またも空想にふける。雨の中、恋人が眠る棺を船に乗せ一人寄り添っていく自分を妄想し、過去の恋人たちを一人一人思い返して涙する。心付けを辞退する飯屋の老婦人の誠実さに胸を打たれ、船の乗り場に着くと、二人の素朴な農民に出会う。農民たちは地元の名士に訴えられ、裁判のため杭州に来ており、作者は農民たちの借金を肩代わりしてやれない無力な自分を恨む。乗船して出発しようという時、自分に先立ち故郷へ帰った妻からの手紙を思い出す。栄養不良の子供を抱いて一人列車に乗った妻との別れの場面を想起し、列車を追いかけ自分を空想する。船上から眺める兩岸の農村風景に古代ギリシャの詩人ヘシオドスの作品世界を連想するも、故郷が近づいたことに暗澹とした気持ちになる。故郷の県城に

到着後、家とは反対の方向に向かい、土地廟で二時間を過ごし、辺りが暗くなった頃に実家の裏門から中へ入る。母親と妻の話し声を聞きながらそと二階へ上がり、妻の部屋で眠る。夜半に部屋に戻った妻と再会し、涙にくれながらともに死ぬ方法を相談する。

自虐の中にも若干の明るさを感じさせた「還郷記」に比べると、「還郷後記」は重く暗い印象が強い。旅行記というよりも、現在の苦しみにつながる過去の思い出を想起し悲嘆にくれる場面が中心である。

「詩人の末路」は「還郷記」と「還郷後記」の間、一九二三年八月一二日に書かれ、同年八月一四日に『中華新報』副刊『創造日』第二期に掲載された。バーンズ、キーツ、トムソンを挙げ、世間に容れられない詩人の苦しみを嘆いている。

この中でバーンズについては、「耕農詞客」「The Ploughman Bard」（農民詩人）として、貧困の果てにジャマイカに移民しようとしたエピソードを紹介し、バーンズの言葉として「ジーンよ、百年後に彼らは私の真価を知るだろう」と書いている。

ジーンとは、当時結婚を許されなかったバーンズの妻の名である。「還郷後記」でも、綴りが異なるがジーンの名

を引用していると思われる箇所がある。川岸の飯屋で、雨中を船で行く自分を妄想した場面で、作者は棺の中の恋人に向かい「Jeanne」僕たちは帰るんだよ、もう船が出るよ！」と呼びかける。恋人と引き裂かれ、貧困のあまりジャマイカに渡ろうとしたバーンズのエピソードは、郁達夫にとつてかなりのお気に入りであつたようだ。

「詩人の末路」は、才能を認められずに世を去る詩人たちの姿をそのまま自身に投影した作品であるといえるだろう。その中で特にバーンズを冒頭に置いていることからみても、当時の郁達夫にとつてはバーンズの存在がひときわ大きかったと考えられる。

「還郷記」、「詩人の末路」、「還郷後記」と三作品連続で、落ちぶれて失意のうちに漂泊しなければならぬ詩人の姿を強調していることから、この時期の郁達夫はバーンズの人生を自分自身の運命に引きよせ、重ね合わせて考えていたといえるだろう。次節では、「還郷記」と「還郷後記」のバーンズ引用をさらに詳細にみていきたい。

### 三・二 エインズリー『バーンズ生地探訪記』

「還郷記」第一章には、次のようにある。

“ 恩斯来的那本《彭思生里参拜记》，你念到什么地方了？ ”

“ 三个东部的野人，

三个方正的男子，

他们起了崇高的心愿，

想去看看什，泻，奥夫，欧耳。 ”

“ 你真记得牢！ ”

「エインズリーの『バーンズ生地探訪記』は、きみ、どこまで読んだ？」

「『東に三人の野人がおりました、正直者の三人男。この三人、厳かに誓いを立てました、エアシャイアを見物しに行こうと』」

「よく覚えているものだな！」<sup>[21]</sup>

これは、主人公が上海出発の前夜、遅くまで友人たちと語り明かした場面の回想である。

「エインズリーの『バーンズ生地探訪記』とは、Hew Ainslie（一七九二—一八七八年）の *A Pilgrimage to the Land of Burns*（一八二二年）を指し、原タイトルに基づいて訳せば「バーンズの国巡礼記」となるだろう。エインズ

リーはスコットランド出身の詩人で、同書はエインズリーの代表作といわれている。スコットランド方言を交えた英文で書かれた同書について、詳細な読解は論者の能力及ぶところではないが、全体像についていえば、エインズリー自身の詩作品を随所に挿入したバーンズへのオマージュといえるだろう。同書はスコットランドの作家、サー・ウォルター・スコット（一七七一〜一八三二年）の小説 *The Antiquary*（「好古家」、一八一六年）に描かれる、老いた乞食にして哲人のイーディー・オウキルトリー（Eddie Ochiltree）を登場させるなど、スコットランド文学そのものへのオマージュでもあると考えられる。

なお、一八一五年にイギリスへ渡り、スコットと親しく交際したアメリカの作家、ワシントン・アーヴィング（一七八三〜一八五九年）は『スコット邸訪問記』の中で、ロバート・バーンズの生地エアを訪れた際、地元の大工がバーンズの亡父の墓に案内してくれ、「バーンズの詩がもっとも貧しく無学な田舎の人達にさえも馴染み深く、彼の詩によってエアの地はいっそう美しくなったように思われる」と語ってくれたことを紹介している。また一七八七年ごろにバーンズと邂逅したスコットは、バーンズを「スコットランドの誇り」と称え、その豊かな詩的感性を称揚

していたという<sup>(22)</sup>。バーンズと彼の詩は一時代、一地域にとどまらず、スコットランド文学そのものを代表するまさに「スコットランド人の相続すべき国家財産」、スコットランド人が「真に自分たちのものと呼び得るもの<sup>(23)</sup>」であったといえるだろう。そして、エインズリーの『バーンズ生地探訪記』もまた、そのような言語空間の中で著されたものであるに違いない。

だが「還郷記」における『バーンズ生地探訪記』の記述はいささか唐突な感がある。若い知識青年たちの会話の中で、時代に迎合して表層的な成功を収める文人を揶揄する流れで登場していることから、外国文学に関する作者の知識をひけらかす目的で書かれたとしか受け取られかねない側面がある。

会話に引用される『探訪記』冒頭の詩は、エインズリーの原文では以下になっている。

There were three carles in the east,  
Three carles of credit fair,  
And they ha'e vow'd a solemn vow,  
To see the shire of Ayr.<sup>(24)</sup>

「還郷記」では、この部分は英文ではなく、中国語の意訳と音訳を混ぜた形で書かれており、特に「什、馮、奥夫、欧耳」が「To see the shire of Ayr」の音訳であることは、『探訪記』を読んだ者でなければ読み取ることはできない。

実は、これはロバート・バーンズの詩「ジョン・バーレイ・イコーン」の冒頭の四句をエインズリーがパロディ化したものである。このことも合わせて考えると、「還郷記」の一節は、作者と知識を共有する者でなければその面白さを感じできない、いわば「内輪受け」の内容になっている。当時の中国の青年読者がバーンズに関する知識をどれほど持っていたかは不明だが、仮にこの一節を読み取れた場合、その読者にとっては、この後に続くであろう作者の道中記が、バーンズに代表される西欧ロマン主義文学の世界観を背景にいたものであることが推察されるのではないだろうか。

作者は道中、数々の見知らぬ女性を恋愛の対象として妄想し、旅を進めることに軽くなる財布に心を痛ませ、農村ののどかな風景にあこがれと称賛の念を抱きつつも、名を立てることが叶わず故郷に敗走する自分を深く嘆く。権力をほしいままにする政治家や軍人を呪い、杭州の美しい風景を愛する一方で、腐敗するその街に恨みを抱く。

こうした作者の姿は、貧困に苦しみながら幾多の恋愛を重ね、同時に強い愛国心をもって政治に関わった農村詩人、バーンズと多くの面で重なっている。

### 三・三 「山のヒナギクに寄せて」の引用

「還郷後記」では、杭州の銭塘江の岸辺、富陽へ向かう船の乗り場で主人公が二人の農民と会話する場面で、バーンズの詩が引用されている。

農民の一人は、地元の名士から支払いの件で訴えられたため、農繁期の人手不足を押し杭州まで裁判にやってきましたと、訛りの混じった言葉で主人公に打ち明ける。主人公は農民を救ってやるだけの金を持ち合わせていない自分を嘆き、次のようにつぶやく。

Thou's met me in an evil hour.

……

To spare thee now is past my power.

……

これはバーンズの詩「山のヒナギクに寄せて」(一七八六

年)の冒頭の二句で、副題は「鋤でその一本を掘り返した際に、一七八六年四月」(On Turning One Down with the Plough in April, 1786)である。原文は諸版あるが、郁達夫が愛読したというヘンリーの前掲書によれば、次のようになっている。

WEE, modest, crimson-tipped flow'r,

Thou'st met me in an evil hour:

For I maun crush among the stoure

Thy slender stem;

To spare thee now is past my pow'r,

Thou bonnie gem.

和訳も諸版あるが、比較的原文に忠実と思われる生田春月訳『バーンス詩集』によれば、次のようである。

小さな 内気な 紅い小首かしげた花よ

わるい時にお前は私に會つた

土くれの中で お前の弱々しい茎を

おまへはわたしに踏みつけられたから

今お前をたすける事は わたしに出来はしない

お前 可愛ゆい寶玉<sup>(26)</sup>

この詩はバーンスが畑を耕した際にヒナギクを掘り返してしまい、その可憐な花を悼む詩である。同時に、一途な愛に欺かれた田舎の乙女を掘り返されたヒナギクに仮託し、小さな命の哀れな運命を嘆く詩人にも同じ運命が訪れ、やがて詩人を押しつぶすだろうという予言でもある。自然を歌い、小さな生命に同情を寄せた農民詩人、バーンスの代表作として位置づけられる作品である。

ここで注目したいのは、「還郷後記」の主人公が不幸な農民に寄せて、彼を救えないことを嘆く場面にこの詩を引用していることである。

伝記によると、バーンスが二十歳のころ、父ウィリアムが借地代を滞納するようになり、ついに差し押さえの令状が執行され、エディンバラの裁判に訴えた事件があった。ウィリアムは裁判に勝訴したものの、訴訟費用ですべての蓄えを使い果たし、数日後に亡くなってしまふ<sup>(27)</sup>。

郁達夫は地元の名士に訴えられて裁判に赴く農民の姿に、バーンスのこのエピソードを想起したとも考えられる。また、この詩を知っている者にとつては、同様の運命が詩人にも降りかかることを予感させる。つまり「還郷後記」

の作者は、この詩を引用することによって、バーンズの詩  
に關する作者自身の知識を示し、農民の不幸に対して無力  
な自分自身を歌うだけでなく、作品後半における主人公の  
不幸な運命を暗示し、そのことが読者に予感されることを  
期待しているのだ。

### 三・四 引用の意図と効果

「還郷記」「還郷後記」に挿入されるバーンズに關する  
叙述は、数少ないながらも、自らの生のありようをバーン  
ズの人生になぞらえて描こうとする作者の意図を垣間見せ  
る。だがその一方で、より強く読者に感じさせるのは、作  
者自身の中国古典文学に關するバックグラウンドである。

「還郷記」では、古代ローマの英雄カエサル<sup>(28)</sup>の故事や、  
ダンテ『神曲』にちなんだ表現が登場するものの、より多  
いのは中国古代神話の引用、漢代文人や唐代詩人の故事、  
詩の一節、明代戯曲の一節など、中国伝統文学の典故であ  
る。上海北駅で列車を待つ主人公が自らの不遇を嘆いて喩  
える「林に宿る飛び疲れた鳥や谷間に帰る衰えた狐」<sup>(29)</sup>は、  
楚辞九章・哀郢の「孤死首丘」に基づいた表現である。

このように、作者の旅と叙述が進むにつれて、読者の眼  
前には中国古典文学の世界がより多く展開される。作者が

属する世界は、西欧文学の世界よりもむしろ中国古典の世  
界であることを示しているかのようだ。

「還郷後記」では、作者の内面世界がより多く描かれる。  
陶淵明の五柳先生に自らをなぞらえたり、農村ののどかな  
風景に平和な神話の材料を見出したりもするが、作者には  
もはや文学の世界に浸る余裕はない。ことあるごとに自ら  
の過去を想起し、現在につながる過去の苦しみを思い返し  
ては涙にくれるばかりである。「還郷後記」の冒頭に掲げ  
られた呉均の詩とフランス語の歌詞は、本来は故郷の風景  
の美しさや家庭の暖かさを示すものだが、ここでは本来暖  
かき麗しい存在であるはずの故郷にも温もりを感じること  
ができない作者の悲哀を逆説的に表すものとなっている<sup>(29)</sup>。

外国帰りで西欧文学の知識を身につけた作者の帰郷、そ  
の途上で明らかになるのは、西欧ロマン主義文学の世界に  
身を浸そうとしながらも、中国古典文学の世界に回帰せざ  
るを得ない作者自身の姿である。憧れの詩人の人生に共鳴  
し、自らの運命を重ね合わせながらも、現実の生活が作者  
を圧迫する。この二作品は、理想と現実、西欧と中国の狭  
間で引き裂かれる中国近代の青年知識人の姿を描いている  
ようにも感じられるのだ。

## おわりに

「還郷記」「還郷後記」は、外国で学問を修めながらも祖国で名を上げられず、失意のうちに故郷へ帰る青年作家の姿を描いている。数々の恋愛を重ね、社会の格差と不正に憤り、貧苦に涙する姿は、貧困のうちに生涯を閉じた抒情詩人バーンズに重ね合わされる。その一方で、中国古典文学からの豊富な引用と典故は、祖国の伝統文学に対する重厚な知識をもつ作者自身の本来帰属する世界をも示している。

郁達夫の作品には、本論で触れたロバート・バーンズだけでなく、ワーズワースやハイネ、ギッシングなど複数の西欧文学作品の引用がみられる。すでにオスカー・ワイルドやルソーなどからの影響について優れた考察が発表されているが、研究が待たれる点も数多い。特に初期の作品群の表現においては、日本近代文学との影響関係が繰り返し指摘される中で、西欧文学との関係については引用の指摘にとどまっていた。今後はこれらの点について深く検討していきたい。

## 注

- (1) 范文玲「郁達夫小説における外国語表現について」、「人間文化創成科学論叢」第一七巻、お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科、二〇一四年。
- (2) 照山顕人「バーンズの生涯と作品」、木村正俊、照山顕人編『ロバート・バーンズ スコットランドの国民詩人』、晶文社、二〇〇八年、第四十三頁。  
 なお、同書に収録されている木村正俊「序論 バーンズの現在——リアルな詩人像を求めて」によると、バーンズが生まれた育ったスコットランド、ローランド地方のエアシャーは、生きた言語としてはスコッツ語が伝統的に話されていた地域だが、バーンズの時代にはすでに英語も使われており、バーンズは二重の言語文化圏で育った。スコッツ語は一般には英語の一方言と受け取られやすいが、最近では、方言ではなく一つの独立した言語として扱うのが優勢な考え方だという。
- (3) 木村正俊「バーンズと政治」、木村正俊、照山顕人編『ロバート・バーンズ スコットランドの国民詩人』、晶文社、二〇〇八年、第三四三頁。
- (4) 岡地嶺『ロバート・バーンズ 人・思想・時代』、開文社出版、一九九〇年。
- (5) バーンズの伝記は木村正俊、照山顕人編『ロバート・バーンズ』、晶文社、二〇〇八年。

ズ スコットランドの国民詩人』(晶文社、二〇〇八年)のほか、岡地嶺『ロバート・バーンズ 人・思想・時代』(開文社出版、一九九〇年)を参考にした。

(6) 岡地嶺『ロバート・バーンズ 人・思想・時代』、開文社出版、一九九〇年、第三頁。

(7) バーンズ詩の和文タイトルは主に『ロバート・バーンズ詩集』増補改訂版(ロバート・バーンズ研究会編訳、国文社、二〇〇九年)による。

(8) 木村正俊「序論 バーンズの現在——リアルな詩人像を求めて」、木村正俊、照山顕人編『ロバート・バーンズ スコットランドの国民詩人』、晶文社、二〇〇八年、第十五頁。

(9) 郁達夫の恋愛と結婚生活については、高橋みつる「郁達夫と孫荃・王映霞——家・家族・愛の視点から」上、中、下の一(『愛知教育大学研究報告(人文・社会科学編)』五五〜五七、二〇〇六〜二〇〇八年)に詳しい。また郁達夫の伝記については伊藤虎丸、稲葉昭二、鈴木正夫編『郁達夫資料総目録附年譜』下(東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター刊行委員会、一九九〇年)によった。

(10) 難波利夫『日本におけるロバート・バーンズ書誌』、荒竹出版、一九七七年。

(11) 夏目漱石「英国詩人の天地山川に対する観念」、『漱石全集』

第十三卷、岩波書店、一九九五年。

(12) 照山顕人「日本でのバーンズ受容」、木村正俊、照山顕人編前掲書、第五一六頁。

(13) 郁達夫「友情与胃病」、上海『平民』周刊第七十四〜七十七期、一九二一年。同作は一九二七年、『郁達夫全集』第二卷『鷄肋集』に収録時、「胃病」と改題された。引用は『郁達夫全集』第一卷、浙江大学出版社、二〇〇七年、第八十一頁。以後、郁達夫作品の引用は同全集による。日本語は主として拙訳による。

原文：我和亨利的第一次接触，是在高等学校时代。那时候我正在热心研究彭思Burns的诗。我所有的彭思的诗集(Poetical Works of Robert Burns)就是这一位亨利先生印行的。我读了他的卷头的彭思评传，就知道他是一个有同情有识见的批评家。

(14) *Select Poems of Robert Burns*、英文学叢書、岡倉由三郎注、研究社、一九二三年。

(15) William Ernest Henley, *The Complete Poetical Works of Robert Burns*, Boston, Houghton Mifflin and company, 1897.

(16) 『第八高等学校一覽』第九年度(自大正五年至大正六年)〜第十一年度(自大正七年至大正八年)、第八高等学校編、一九二六年。

(17) 郁達夫の読書体験については、大東和重「郁達夫と大正文学——〈自己表現〉から〈自己実現〉の時代へ」第二章「日本留学時代の読書体験」(東京大学出版会、二〇二二年)に詳しい。

- (18) 郁達夫「介紹一個文學的公式」、『晨報副鐫』「芸林旬刊」第十五号、一九二五年九月十日および『晨報副鐫』第一二六九号、同年九月十一日。
- (19) 郭沫若「創造十年」、『創造十年・統創造十年』、松枝茂夫訳、岩波書店、一九六〇年、第一六八頁。
- (20) 郁達夫「還郷後記」、『郁達夫全集』第三卷、浙江大学出版社、二〇〇七年、第四〇頁。  
原文: Jeannal「我们要回去了, 我们要开船了!」
- (21) 原文は『郁達夫全集』第三卷、浙江大学出版社、二〇〇七年、第十二頁。訳文は拙訳「還郷記」、中国一九三〇年代文学研究会編『中国現代散文傑作選一九二〇・一九四〇 戦争・革命の時代と民衆の姿』、二〇一六年、第二〇四頁。
- (22) アーヴィング『ウォルター・スコット邸訪問記』、齊藤昇訳、岩波書店、二〇〇六年、第三十二頁、第一三七頁。
- (23) アーヴィング『ウォルター・スコット邸訪問記』、齊藤昇訳、岩波書店、二〇〇六年、第三十四頁。
- (24) Hew Ainslie, *A Pilgrimage to the Land of Burns*, 1822, p.1 出版社不詳。
- (25) William Ernest Henley, *The Complete Poetical Works of Robert Burns*, Boston, Houghton Mifflin and company, 1897, p.38.
- (26) 「山の雛菊に」、『パランス詩集』(泰西詩人叢書第三編)・生田春月訳、聚英閣、一九二三年、第一〇五頁。
- (27) 照山頭人「パランスの生涯と作品」、木村正俊、照山頭人編『ロバート・パランス スコットランドの国民詩人』、晶文社、二〇〇八年、第四十九頁。
- (28) 郁達夫「還郷記」、拙訳、中国一九三〇年代文学研究会編『中国現代散文傑作選一九二〇・一九四〇 戦争・革命の時代と民衆の姿』、二〇一六年、第二〇九頁。
- (29) このような逆説の叙事は郁達夫の小説『蕩行』にもみられる。詳しくは拙論「郁達夫『蕩行』をめぐる初歩的考察——その表現と作家イメージ」(『神話と詩』第十二号、二〇一四年)参照。なお同論文では郁達夫の妻子が上海から帰郷した日を二月として「蕩行」の事実性に疑問を示したが、「還郷記」「還郷後記」の記述は「蕩行」の設定と合致しており、この点からみると「蕩行」の日付に関する記述は事実通りと考えられる。
- (30) 例えば大東和重『郁達夫と大正文学——「自己表現」から「自己実現」の時代へ』、東京大学出版会、二〇一二年など。
- 「キーワード」 郁達夫 ロバート・パランス、「還郷記」、「還郷後記」、中国近代文学